

山田緑雨
バムフレット

平市建設論

(平町昨、今、明)

平市建設論

平市建設論

(平町昨、今、明) 山田綠雨述

◎はしがき

余は是より平市建設論を草する。時、將に初夏松ヶ岡山頭の櫻花も、散り失せて了た。惜春の哀感なぞ、つてやまぬ。しかも余が思は遠く二昔前に走せる。閑寂目のあたり見る山頭の櫻樹は高サ數尺にも過ぎざる苗木であつた。天地化育の恩寵と郷人の愛育は現在の大木にまで成長させた。今更に大自然の力に驚異される。蘇つて思ふ。山頭の櫻樹のみが成長したのではない。自分も平し——「ふるさと」故山磐城平も成長したのだ。今や自分は情感もゆる青年期を終つて成熟した壯年期に入らんとして居る。而して、ふるさと、平は町より市への過渡期にあつて、而も極めて最近、市制は施行されんとして居る。大平市出現の華想は、巖頭、黎明を待つ者人の心情の如く、三萬平人の胸より胸に、心より心に華々しく燃え上つてやまぬ。さらば余も生輝「平つ子」として、而も一個の文章労働に従事する文化業者として、郷土の恩恵に浴する事甚大、文章報郷の一念に點火して、斯小論を草せようとする。寛はくば一讀の程を懇求してやまない。

◆過去への一瞥

「奮闘、建より新文化への約半世紀の間、町勢進展の跡を顧みて」
明治維新！奮闘建日本の一切のもの、創新（ルネサンス）であつた明治維新を非常轉機として、日本は雄々しくも新日本創建の途に向つて邁進した。徳川鎖國二百年の白日の甘夢は、浦賀灣頭、一發の科學的爆音に驚醒され、我（日本）以外に彼（西洋）あるを確實に認識した當時の日本人の心的動搖、混亂、驚異は、大和民族發生以來未曾有のものであつた。さり乍ら現實を深觀し、脚下を凝視し將來を先見豫察するの明ある維新の指導者は一死以つて日本に報する信念鋼鐵の如く萬難を排し俗論を斥けて、「開國進取」の國策を樹立した斯の幕末維新志士が報國の丹心は、千載尚ほ凡夫を感激せしめてやまぬ。「余は今、筆を執つて、郷土半世紀の過去を一瞥せうとして、端なくも、日本半世紀の過去を追憶すると共に維新當時の指導者の心事に想到して感無量である。何となれば昭和維新日本の指導者を仔細に點檢し、明治維新當時の指導者と比較してその人間としての價値に於て何れが優れりやと考量する時、前者を以つて優ると斷言するの勇氣欠乏するか故に感無量と痛嘆せざるを得ない、敢えて讀者の一考を煩はす」。

さばれ、明治維新を非常轉機期として、建國三千年來の既成一切のもの、上に改革の大斧は何等の容赦なく下された。世界思想、西洋文明は、恰も狂瀾怒濤の如き猛威を逞うして舊日本の岸壁に逆捲き、物質と科學と器械の白人文明は洪水の如く、日本全土に氾濫した。

白人文明の洗禮を受くる點に於て、地の利を得ざる白河以北、東北日本の漠野にも、新文明の光芒は投影された。郷土磐城平、は新文明輸入の點に於て、比較的恵まれたる地理的位置にあつた。

約卅年前、文明輸入の最先條件たる交通關——鐵道は敷設された。日本橋の水は、テムズ河の流に通ふ」とは詩人の空言ではなく、鐵道の敷設の結果「朝に大東京の流行は夕には故山磐城に流行する」の有様とはなつた。

加之、日清、日露の戦勝は『東洋の日本』よりして一躍『世界の大日本』たらしめ國威

の伸張、國勢の發展は、世界人類歴史上、特筆大書すべきものであり、國家經濟力は將に幾何級數的に増大し、國力の發展は世界の驚異とまでなつた。

斯くして國家の權威は、年々歳々加はり行く間に突如として、世界大戰でふ國際的世界的大問題に遭遇した。之れに對する日本の善處は遂に世界三大國の一として、世界的、國際的問題に對して日本の諸否は重大視されるに至つた。

本文の筆者は戰爭愛好の主戰論者や軍國主義ではないけれども、戰爭は時には與國の原因となり又或時には亡國の動機となる事實を最近世界文明史上、日本とロシア、米國と獨逸に於てその例證を確認するものである。

若しも日清、日露、及世界大戰なかりせば或は前述の如き『世界の日本』としての國際的優位は樹立し得なかつたかも知れぬ。

さもあらばあれ、筆者は本論に戻る、三戰争に依りて、豈唯々ひとり國勢のみが増大進化したのではない。日本の全土、津々浦々九州も北海道も、殖民各地も、それら、面目新一したのである。向上發展したのである。殊に郷土警城の發展は驚く外はない。

昨日(五月十九日)斯のバムフレットの材料を得んとして、町役場を訪れ、提供された諸種の材料を一覽して、何よりも先づ、した

いかにわが心を撃つた一事は『人口の増加』である。

諸君よ!! 心して左の表を見あれ

年次	人口	戸數
明治卅四年	九、〇六二	一、九〇二
全 四十年	一三、四九五	二、六四〇
大正 六年	二〇、八四四	三、四四二
全 十五年	二五、四七六	四、六四二

明治卅四年より大正十五年まで——廿五年間人口の増加は約二倍八分強である。余は、今更に經濟學者マルサス氏の『人口論』を新らしき感慨を抱いて、一人しめやかに思案に耽るものである。今日(五月廿日)東京新紙は傳ふ(報知新聞掲載)

殖えて行く

日本の人口

統計局長 下條康麿

人口及び食糧問題の解決は、日本刻下の最大緊要の懸案として、何人も頭を悩ます問題であるが、昨十五年度及び昭和元年度における人口動態を見るに、更に驚くべき人口の増加を來たしてゐる。同年度人口動態の確實數を

發表するまでにはなほ、一ヶ月位を要するが、今日まで調査概數によれば出生死亡の差による人口の自然増加は、實に九十四方に達してゐる。

これは、今日までになほ未曾有の大増加であつて、これに届出遅れなどを加ふる時は、昨年一ケ年の増加は、恐らく百万を越ゆるであらう。すなはち人口増加の最もいちじるしくかつた注目された十四年度の八十七萬五千にくらべると、なほ六萬五千七百を増してゐる。今増加の原因たる出生を見るに、昨年中の總出生數は二百萬七千七百二十で、前年に比し一萬四千六百二十九を増し、出生率からいへば、人口千に對し三四・七の割合となり、前年よりも〇・二の減少を示した。

しかし、死亡は總數百十五萬九千六百卅五で前年に比し五萬一千七十一を減じ、死亡率は人口千に對し、一九・二の割合で、前年よりも一・一の大減少を示し、死亡率は明治卅二年の人口動態調査開始以來、かつて見ざる低率を示したのである。かくの如く出生の増加死亡の減少が兩々相まつて一昨年にまさる増加のレコードを見たわけである。

なほ婚姻、離婚、死産を見るに、昨年の婚姻總數五十萬三千六百六十一件で前年に比し、一

批判と垂教を乞ふ。

現下の平町管見

(1) 町政要覽について

余が札上には、平町政要覽(大正十四年十二月末日現在の調査)が披かれてある。斯の要覽を編纂するまでの諸般の調査、材料の蒐集、諸種の研究等に就て、余は當事者の苦心努力に對して無條件にて、滿腔の敬意を表するものである。余は故山に歸來して四年間、數回の小著をもし又、今現に本文を認めながらも痛感する事は、たとひ片々たる小著を刊行する事であつても、ナカ／＼に人知れぬ苦心を要するからである。世路辛らき世の中ではある。金も欲し、酒も飲みたし、友とも談りたし、さり乍ら 執筆の感興覺めやらぬ間にと、一字一句、一章一節、コツ／＼と認め行く事は、苦痛を伴ふ精神的勞働である。一書を生むは、一愛兒を生むが如き陣痛の苦しみを体験する。

殊に余の如き鈍根の駑馬にあつては) さて要覽述記する所を巨細に研討するに、土地、水道、戸口、工産物、商、工、農、牧畜、機業、より 學事、兵事、衛生、金融、財政、町政機關等、々々、すべて廿九頁に分別されて、一見して平町の現勢を要覽するに足

萬八千三百七十七件を減じ、人口千につき八・三の割合となり、最近數年間にない低率を示しました。離婚は五萬百件で、前年に比し千五百八十七件を減じ、人口千に對し八〇・死産は十三萬三千八百六十で、前年より五百四十三を減じ、人口千に對し二・〇の率を示し離婚と同様年々遞減のすう勢にあるものと見られて居るが、とにかくこのすう勢で行くとこれまでの日本の人口増加年々の平均七十萬といふ數字は既に十四年度以降においては九十万内外の平均率を示すことならう。

右の記事を一讀しては、何人と雖も此の動かすべからざる事實——數字の前に深觀久うせざるを得まい。やがて日本の總人口臺位に達する日も、それ遠くはあるまい。

従つて警城中も 參萬を突破し、人口五萬の大平市實現の一事も、一片の空想ではあるまい。又、余が秃筆を呵して、時期尙早にも拘はらず **平市建設論**と銘打つる小著を公刊するも亦 それ徒事ではあるまい。

さて舊封建より新文化への約半世紀間、平町々制施行以來、町勢進展の跡を顧み——即ち過去を一瞥して考察せらるゝ事は

一、平町々勢の進展は國家非常時即ち戰爭ある度毎に急速度に進展するけれども、一度平和の状態に歸するや、町勢進展の

る。

近代商業都市平町たることを観取し得ると同時に、生産の平にあらざるして消費の平たる事を直感してやまぬ。乃ち附近の海産物、農産物、工産物等の買取引行はる、一大市場たるの観がある。

大半の町民諸君は、生産者と消費者との間に介在して、生産者の買取引上より生ずる手數（利益）に依りて生活を営む、所謂商人であるとして過言ではあるまい。商人は物と金との中に生きる。従つて平町は商業主義的精神——町人根性旺盛なる所拜金宗の信徒充滿する所である。（讀者よ！！）

余は余の生れ故郷を愛する精神に於て、郷土に捧ぐの熱血豊富なる殉郷者たる點に於て斷じて人後に落ちざる確信を有する。されど自家の天職たる文筆労働者としての文化業者文明批評家の立場よりして、郷土及郷人を胃潰せざる範圍に於て、自己の信する所を勇敢に開陳せねばならぬ。冀はくば大雅量を以つて終りまで讀過されん事を熱求する。

余は平町は一大市場であるを斷じた。町民の大半は市場に活動する商人であると斷じた商人は、安く良品を、需要者に提供せねばならぬ。故に安く良品を供給する生産者を他よりも早く發見して、而も需要者を——高多量に需むる買手を、一刻も早く發見せねばならぬ。

信すればである。

さて政界の鬪將、尾崎行雄先生は痛嘆して曰はく『現代の世相は幕末維新に彷彿たり』と。

先生の意、蓋し混沌たる過渡期を象徴する現代と幕末維新の世相の酷似するを痛嘆して慨世憂國の赤心を吐露されたる血火言と信する。

先生の血火言、移して以つて郷土磐城平の現狀とすべし。

『現下平の實相は幕末維新に彷彿たり』と余は熱説してやまぬものである。

幕末維新は頼朝、鎌倉に幕府を開いて、天下の政治を武門の手に壟斷してより六百年間の舊封建政治の倒潰であると共に徳川二百五十年間、外、世界に向つて鎖國日本たらしめ對世界の交渉を斷絶して、一閥族徳川が専横を極めし舊專制政治の破産であつた。一言にして云へば不合理なる舊勢力倒れて、天地の公道に基きたる日本創國本來の面目たる——

一君萬民の政治に還つたのであつた即ち不合理なる舊き勢力は倒れ、合理的新勢力が復興し來つた一大非常轉換の過渡期であつた。

大政奉還、維新當時の過渡期に當つて、大勢達觀、時勢先見の明ある諸藩の志士仁人は藩主を熱説して、勤王倒幕の大義を唱導して

ばならぬ。

一大市場であり、商人充滿の平が、心ある旅人をして、活氣充滿、景氣横溢の東北の大坂とまで感嘆激稱せしむる道理明白ではないか。そこには電光石火の『自由競争』が行はれ、『優勝劣敗』『勝負損得』が行はれる（試みにたそかれ時、街頭を行けば、終日の商戦に疲れ果てたる、蒼白の店員物憂げに店頭に座するを見ては、多感の詩人ならずとも一種の生活悲劇的哀感を、そつてやまぬものがある。）

(2) 平町の一面觀

心して、平町現下の一面を觀す。一時的にして永遠性なく、平面的にして立体的ならず一時的、平面的活動はあれども、永遠性ある立体的行動に乏しい。損得利害の打算には第六感神經をもつ程、敏感ではあるが、永遠性ある計畫、理想を實現遂行する精神欠如し、低級なる現實主義あつて、高遠なる理想主義がない。従つて人心浮薄にして、輕信輕舉、定見なく操守がない。

對建時代の所謂『城下氣分』は地を拂つて空しく、十代連綿の純生郷土人たる『平ツ子』の家は過半没落して、之れに代はるに、越後、會津より移住したる他來人

王政復古の聖業を果した。

讀つて磐城平藩は、かゝる非常展開の大過渡期に善處して、大義を過つ事なく出處進退宜しきを得たか？果して又小節に拘泥して大節を過つたか？

讀者諸君！一度び、城山々頭、廢墟の殘石に立つて『つはものどもの、夢の跡』を語る夏草に聽かれよ。

余は幕末維新當時の郷土先人の大義を過つて出處進退を、今更彈擊しても詮方なき仕儀と斷念する。乃ち當時の磐城平藩士中、大勢達觀の先見の明ある唯一人の『指導者』なかつた事を痛嘆するものである。

讀者よ！指導者なき磐城平、豈唯當時は現代は舊式英雄を必要としなない。征服、侵略、戰爭を常習慣行する軍國主義的帝國主義的英雄を必要としなない。さり乍ら、何時の世も、如何なる時代も『指導者』は必要である。

何となれば古今東西、大多數の民衆……大衆は現實の生活問題——衣食住の問題に追はれて他を顧みるの餘裕がない。アタックとしてその日々の暮しに没頭する。明日を先見して否！十年後、五十年後、自分一生涯の肉の人生ばかりでなく、次代を先見して、即ち永遠を先見し達觀し透視して、現實より

すさまじくも恐ろしき猛威を逞しくして、今や磐城平は、一個の殖民地化してしまつたかの觀がある。

既に殖民地化したる平である。健全なる郷土文化あるなく、人格中心の紳士道あるなく、共存共榮の商業道德あるなく、永遠を指標として理想實現に益進する哲學的精神あるなく、低級なる今日主義に墮し、金と物と肉との魔力に幻惑し、温かき人間味ある生活を營むるは果して幾何ありや。是れ平町の一面觀ではある。果して是乎。非乎。

(3) 指導者なき過渡期の平町

明治維新以來六十年、平文明推移の跡を學的に研究すれば、將に膨大なる『平文明史』の大著は生れるであらう。（交友、諸君勿來君は『磐城文化史』著述中の由、一日も早く公刊を待つてやまぬ。何となれば斯一書は郷土磐城の先住民が、如何にして生き、如何にして死せしやを詳見する先住民の地上生活斷面たると共に、郷土先人の生活態度を知悉してわれら現代郷土人が、現實に生くるの指標を感得すると共に、次代郷土人が、如何にして生くべきかの生活道樹立、生活哲學創造の上に一大指導原理を啓示するものと余は

より善き状態——理想を打ち樹て、指標を示すは大眾中より選ばれたる人——指導者の天職である。コノ指導者が昔も今も、維新當時にも昭和の磐城平にも見當らぬ。

社會に指導者なきは、學校に先生なきと同しく、國家に指導者なきは、舵なき舟と等しく人類に指導者なきは天に太陽なきが如くである。

冀はくば三大指導者、磐城平に、日本帝國に、世界人類に出現して、郷土と故國と世界は進むべき道を示す高手指見したきものではないか。期して待つ！高手の所有者——指導者一日も早く出現せん事を。

(4) 寄生より生産への平町

平町は寄生して居る。海に山に畑に畑に寄生して居る。海産物、農産物、工産物等の商取引行はれる一大市場である平町に居住する町民諸君は、天生、寄生人である。買取引の手數（利益、カスリ）に依つて生活して居る生産者より消費者、供給者より需要者の間に介在して寄生々活を営んで居る。二萬五千町民中、自己の額に汗して筋肉労働に依り、物の生産に従事する生産人果して何人がある。

經濟學者はいふ。日本は農業國である、國

民の大半は農民であると。然るに、町勢要覽は示す

種別	農業		専業		兼業		計
	自作	小作	専業	兼業	専業	兼業	
戸数	三三	一五	七	三	七	三	
合計	三三	一五	七	三	七	三	二九六

(大正十四年十二月末日現在)

而して大正十四年當時の全戸数は四千四百九十戸であるが故に農家戸数は全戸数の壺割にも足らざるものである。

更に工産物の生産に従事する

製造戸数、二二二

職工、六一二

價格、六一一、八五六

又醸造業に従事する

製造戸数、三二二

價格、三三二、五七五

其他、牧畜、養蚕、機業等に従事するもの極めて少數。

故に曰はく「平町は生産の平町にあらずして寄生の平町」である。

讀者よ！余は純生郷土人として、自己の生れふるさとを、寄生の平町など、不快極まる文字を冠して、讀者の心を不快ならしめて、

めて、決して快とするものではない。たゞ、ひたぶるに郷土の現實を深視して全なる發達をなすつゝある近代都市と斷言する事能はざる、幾多の材料、事實を直視するが故に、寄生など、人聞き悪き、不快の文字を認めざるを得ない次第とはなつた。寄生虫、寄生木は、その寄生する本体、本幹が衰滅倒潰すれば共に滅亡するは、科學の事實の教ゆる所である。

洋々春海の如く、希望に輝いて居る。さる悲觀説は絶対無用である。大いに樂觀して可なり」と、安堵さしてくる仁あらば、余は衷心より感謝に堪えざるものである。敬愛措かざる郷土青年者よ！……暗黒の廢都平を出現さすか、光明の文明都市「大平市」を實現さすか、一に懸つて、卿等の双肩にある。愛郷精神横溢せる現下平町の熱血青年に一考を煩はす。

◎平町の明日

(平市創建の一私見)

寄生的存在は漸じて健全なる生存ではない。平町の過去、現在の、寄生的、他力的存在は「大平市出現」を阻害する條件とこそなれ、發展の條件とは斷じてならない。

われらの腸の一部に寄生する十二指腸虫は人体を養ふ營養物を搾取して本体を衰滅させる。

天を摩する老大木に寄生するやどり木は遂に大木の生命を斷つ脅威となる。

もしも磐城平が永遠に磐城の海、山、田畑に寄生して、他刀の生活態度を繼續し行くならば、やがて大木を倒したる、やどり木の如く、人体を衰滅させた十二指腸虫の如き結果を將來すまいか？

本文、讀者の中、そは、一片の杞憂なり、と勇敢に確説し、その反證を擧げて、余をして此の悲觀的暗黒氣分を一掃し「郷土の將來は

余は、上來、昨、今の平町に就て、一家言を陳述した。(此の小論文の讀者諸賢の中には余が一家言に對して、贊否の兩論を持たる、立言者たる自分にあつては、安價なる迎合的贊成者よりは寧ろ、余が私見を嚴正批判し、余が意見の是非を糾明せらる、事を熱望してやまぬものである。余は一讀書生として、真理を熱愛してやまぬもの、冀はくば諸賢よ！痛快なる一駁撃を余が私見の上に與へられん事を)。

さらば是より明日の平町に就て極めて簡潔に、平市創建に關する、左の十項の具体案を

列擧して私見を開陳する。

(一)、市民たる自治的訓練充分なりや。

現下の平町民諸君は市民たるべく自治的訓練充分とは云へない。先年余は福島、郡山兩市に遊び、兩市民諸君の、市民たる訓練の行きたるに敬服した事實があつた。

(二)、人口三萬以上の市民生活の保證ありや。

平町は町としての發達の頂點に達して居るされど市たるべく尙早の觀がある。何となれば、人口參萬以上の市民生活を保證する經濟力乏しが故に。

(三)、環境(農村、炭礦、海岸)の他力生産に寄生して、平自身、自力生産の創造生活の必要なきや。

此の點については「寄生の平町より、生産の平町へ」にて既に痛論せる故、茲に贅言を要しない。

(四)、市民たるべき政治教育充分なりや
今や、普遍に而して居る。顧みて普通選に對する政治教育の準備完きや。と深觀すると、又、明日の大平市民として政治教育充分なりやと考察する時、市民としての名實相俾ふ自信ありや、甚だ懷疑に堪えない。

(五)、私立中女學、工業學校及専門學校級の教育機關の設置必要なきや。
試験地獄の聲は天下の輿論である。縣立聲

城中、女學校の入学難は年を追ふて激甚、前途有爲の少年少女を試験地獄の犠牲たらしめ、年少者を絶望の深淵に墮せしめ、やがて救ふべからざる淪落の人たらしむる事は、由々しき社會問題である。故に官學萬能の奮想を打破し、私立中、女學校を建設して、郷土富豪の奉仕と特志家の客與に待つて、私學の設備を完備し、人材を養成すると、共に他面に於ては「生産の平」實現のため、小學より直ちに入学し得る「工業學校」を建設し「生産の平」に最先必要人物たる「生産人」造就を企つ。

一にも中學、二にも女學と、猫も杓子も「未完成の教育」を受くるは考ふべき事である。

(六)、民衆圖書館、商業會議所、民衆集會場、自治研究機關、高級言論機關、市區改正、民衆的俱樂部、等の設置。

(七)、小名濱商港實現促進。
平、小鐵道、片濱軌道敷設促進。
(八)、平町郊外に一大生産工場を設立を企て、資の集中活用を必要なきや。
(九)、平町に於ける、中産階級以下の青年女性をして、享樂と奢侈、遊逸と安逸、——不生産的浪費生活より解脱せしめ、額に汗して生くる生産労働の生活に指導する必要なきや。

現下平町には未婚の中産階級以下の女性過多にある。その多くは、極言すれば不生産的浪費生活を營む、家庭の「寄生人」である。彼女等は「欠伸と浪費と虚榮」の生活を營む。生産的勤勞生活に導くは、獨り彼女群のためならず、一國産業發展の爲にも肝要な事である。婦女労働に適當する産業の出現を望む(十)、山、町、村、海の指導階級者が、大同團結して産業調査研究機關の設置必要なきや。

軍隊に一切の作戰計畫をする參謀本部あり、産業調査機關は、平和的經濟戰の參謀本部の役目を果たす、現代の科學を産業に最善用する方途の研究機關である。……「終り」……

時、將に梅雨期に入らんとして秀節悪く、從つて執筆氣分消滅明快ならず、されど斷續ながら過去一週間、門外不出、漸活して、斯の小論を終結したる不肖の努力を諒せられ、懇辭乱文、御覽慈の程を。

昭和二年五月二十六日

縣社子鐵倉神社の杜の老鶯が奏つる高朝の美音に耳傾けつ、認めしる。

山田 綠雨 述

平町六丁目 電話五五〇 山光堂 自轉車商會 主山田信次	諸橋元三郎	關内正一	釜清支配人 河田梅吉	好間村 渡邊清 鈴木榮一	平町田町 千葉發身	平町會議員一同	平町信用組合	平劇場前 電話六六七 大塚亭	平町一丁目 大平屋藥店	平町四丁目 電話五二八 魚問屋	
平町三丁目 電話三八 三井吳服店	大町二丁目 大村屋旅館	平町鍛冶町 吉野鐵工場	平町田町 電話七二八 尼忠	平町四丁目 尖戸屋 松崎佐平	平町田町 電話二五四 馬目支店	平四丁目 電話一八番 磐城工業商會 主 中村佐治助	平町大工町 多田井質店	平町白銀町 電話三二九 釜清商店	豐間村 大敷網事務所	諸機械販賣 日東商會 平町白銀町 電六五〇	
平町白銀町 電話二六七 田邊機械店	平町二丁目 電話三番 西村屋藥舖	平町四丁目 醫藥藥品 關内藥舖 工業藥品 關内藥舖 有名賣藥 關内藥舖 洋酒雜貨 關内藥舖 染料塗料 關内藥舖 振替仙臺六五一六番 電話(七番) 電話(七番)	平町五丁目 山野邊藥局 藥劑師 山野邊東次郎	平町二丁目 電話一三一 清光堂書店	平町四丁目 電話三三四 柴田書店	平町三丁目 電話二一八 坂田金物店	平町三丁目 電話七六番 龜田屋吳服店	和洋酒類商 廣瀨支店 平町田町 電話五七番	平町三丁目 電話六七番 中野吳服店		
平町二丁目 越乃家	大藏省免許 湯本信用無盡 株式會社 湯本町 電話四七番	平町字田町 電話一三五 高久病院 院長醫學士 高久忠	平町田町 電話四七五番 赤心堂病院 院長 新妻由五郎	磐城共濟病院 電話六四一番	佐川洋服店 營業所 常磐線平町三丁目 本店 常磐線平町南町通 支店 常磐線植田町本通 電話呼六二番	カフエータヒラ 平町一丁目 電話六二〇番	日本石油株式會社特約店 關内油店 支店 茨城縣多賀郡關本 電話六四〇番 電話三三七番				

元警城中學校長 榎竹源太郎	元代議士 安島重三郎	釜屋商店主 諸橋久太郎	平銀行頭取 山崎與三郎	磐城銀行專務取締役 白井一郎	堀江工業株式會社 江口忠一	久之濱商會倉庫株式會社 專務取締役 堀部留造	小田炭礦株式會社 社長萩原申八	好間軌道株式會社 山崎佐市郎	内鄉村々會議員 加藤丈一夫	江名町 吉田正雄	遠藤俊一	
磐越銀行頭取 中野甲藏	磐城實行專務取締役 鈴木辰三郎	東部電力株式會社 平營業所 所長 武田精一	湯本町區會議員 比佐源造	縣會議員 木村茂清	大井上陸四郎 小野野平	古草川順一	所得稅調查委員 榎田榮太郎	赤津庄兵衛	縣立回春園園長 醫學士 川井重之	平窪村 松本德一	工業商會 佐々木健一郎	
好間村大館 青木貴一郎	四倉消防組頭 戸田兵藏	四倉電氣株式會社社長 新妻盛	平町 山崎清三	諸橋守次郎 井上貞治	柴田德太郎	關内正一	平町々會議員 丹野榮三郎	關内正一	西村屋藥舖主 鈴木堅助	石城第一區小學校長會 第二區小學校長會 第三區小學校長會 第四區小學校長會	平町公立學校長 懇話會	平運輸株式會社
平材木商業組合 平理髮業組合 平藝妓屋組合 平料理組合	常磐工業株式會社 小野庄一	植田物產株式會社 山崎登	平町二丁目 薄錫製造 仕出し 藤市	荒物雜貨 伊勢屋	平停車場前 電話一四九 住吉屋支店	平二丁目 電話二三番 天一屋商店	平町研町 電話二五七 吉村製綿店 店主 吉村安次郎	平町四丁目 電話一四四 小野藥店	平町鎌田町 電話三四八 草野染工場			

石城郡銀行組合

四倉會社銀行組合

東部電力株式會社 平營業所

植田水力電氣株式會社

二本松電氣株式會社 出張所

磐城建物株式會社

入山探炭株式會社

磐城炭礦株式會社

小田炭礦株式會社

古河礦業株式會社

山崎合名會社

電話一〇番 圖二七番

鐵道省 御指定 仙臺高等工業學校試驗證明



万年瓦工業株式會社
福島縣四倉町
電話三八番

平町五丁目

釜屋商店

電話九番一三九番

【定價金二十錢】

昭和二年六月廿八日發行本
同縣石城郡平町字研町十九番地
著者 山田政好

福島縣石城郡平町字研町十九番地
印刷者 熊澤謙次郎

福島縣石城郡平町字研町十九番地
發行所 釜屋商店
福島縣石城郡平町字研町十九番地
發行者 山田政好